

園のくらしを育む16（最終回）
豊かな園のくらしに向けて

秋田喜代美

1 瞬時の判断に生きる

ある四歳児クラス。ひとしきり遊んだ後で片付けをして集まる時間になった。皆が
一か所に集まってきている時に、こうちゃんだけが、ふらっとベランダに出て行く。
先生としては集まってほしい時間である。こうちゃんは、ベランダに出ると、ひ
さしの所のビニール屋根にポツ、ポツと雨音がするのに耳を傾ける。降りだした雨音
が聴こえてくる。彼は、ベランダから外へ手を伸ばそうと、ベランダから一步園庭に
足も出す。担任の先生はこうちゃんの様子を見ながら呼びに行く。もう皆は集まり、
彼を待っている。

その時先生は、こうちゃんの傍らにしゃがんで自分でも手を出し、「雨と握手」と
一言そつと語りかける。すると、こうちゃんもベランダから外へ手を出し、雨のしず

くを手に受ける。先生が「入ろう」と言うと、ぬれた靴の裏で木のペランダに跡が付くを見て、二、三度確かめてから部屋にすつと入り、皆の輪へと参加していった。先生は何もなかったように皆に語りかける。

彼を呼びに行った後の保育者の判断に、くらしの中で子どもの感性を育んでいくのはこうした瞬間かもしれないと思ったシーンである。それは、その子の今かわろうとし、向かっている対象世界と、その子の心もちを一緒に受け止め、自分の思いをひとまず傍らにおいて、その世界を共に生きてみようという入り込む時に生まれるのかもしれないと感じたからである。

このエピソードはその直後の写真も残っているので、研修等でお話をさせていたதாக。すると「私も雨と握手って声をかけてみたい」と後で私に話してくださったり、「雨と握手の歌が作れそうですね」と音楽に関心をもつ方から言われたことがある。その方々の言葉にうなずきながら、わかってもらえていないなと感じることがある。その方たちの言葉のお陰で、私が心打たれたのはその比喩の言葉のうまさでもなく、そこから始まる次の展開の可能性でもない。瞬時の判断に子どもと共に生きることが、大勢の子どもを預かる保育者だからこそ難しい、だがそこにこそ専門性の奥深さがあると言いたいからだと思ふ。

雨の日の研究保育、計画には何もないが、さりげなく空いた瓶を並べ、底にたまつた水の高さで音の響きを楽しむ保育をされる先生がおられる一方で、「今日はお外に出

られないからどうしても黄色い声が出て落ち着かないんですね」と言われる先生もいる。保育者の感性とともに子どものその日のくらしの世界がどのように広がるかの質の違いが生まれるように感じる。

2 シンプルな中の豊かさを問い続けて

自然の緑の色、雨の音や風の音、良質の音色、採れたての野菜の香り、手を掛けて作られた食事等、それらは要素に分けることのできない複雑なグラデーションをもっている。脳科学者の小泉英明先生とお話をさせていただいた時に、自然音は音響スペクトラムで見ると最も豊かで人間の脳の深いところの大脳皮質に届くのに対し、電子音は特定部分だけが目立つ単純な波形になると伺った。そして真の科学とは、子どもの幸せのために最も根源的なくらしの姿を明らかにするものであるはずだという話で意気投合させてもらった。乳幼児期の子どものくらしが、「お子様用」と称して目的や機能がわかりやすい、使いやすくと狭められた玩具・遊具や、電子的な音や色調、どこでも同じような味や手触りになっていったとしたら、それはどれだけくらしの経験の幅を狭めていくだろうか。

園のくらしは、子どもが出会うさまざまな環境が織り成し合う豊かさと、そしてその中で交雑する意志や魂の出会いや対峙の中から立ち現れるさまざまな声の表現が生まれてくる場であってほしい。それは単純に見える中、一の中に多が見えていくこと、

そこから創造する想像性によって現実から遊びの世界へ、また遊びから現実の世界への往還で成り立つ世界ではないだろうか。その感性をこそ、子どもも保育者も大事に育てていきたい。

だからといって、自然の中で子どもを育てることが園のくらしであるべきとのみ言っているのではない。例えば積み木はフレールベル以来世界中で使われてきている。特に良質の木の積み木は長く園でも使われる。積み木は自然の中にある形ではない。子どもが最初に触れ合う意図された立体物経験であり、記号としてのものの分節化と統合を導く単位となるものである。そこから子どもはものを見立て、見通しをもってかわり、時には無造作のものからある意味を見だし、見積もったり見つけめ合ったりしながら無限の関係を生み出していく。このように、くらしの中にある環境と素材は、ある意図をもちながら子ども自らの主体的動きと判断を引き出し、新たな世界を生み出す可能性を導くものである。園のくらしは、感性から知性を立ち上げ、新たなものを創り出す場となる営みではないだろうか。

二年間の連載で、くらしについて私自身が見つけていく機会をいただいた。この点に深く感謝しつつ、園のくらしへの訪問者として今後も考えていきたい。

(東京大学大学院)